
四二紙 —シニカミ—

泣虫太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四二紙 ― シニカミ―

【Nコード】

N 4 1 1 2 B A

【作者名】

泣虫太郎

【あらすじ】

ある日。ただの高校生である春元夏人は、カラスにリンチに遭っている所とある女の子に助けられる。しかし、その女の子は、生きている人間ではなく、シニカミという……幽霊だった。そして、その日を境に、なぜか夏人は、シニカミVS悪霊達のオカルト戦争に巻き込まれて……

第一話 シニカミ

俺は、走っていた。

……いや、別に、走っていると言っても、それはランニングとか、体育での準備運動の類いじゃない。

本気で、全力疾走しているのだ。

後ろから執拗に攻撃してくる、あの黒い群れから逃げる為に。

「くそつたれ……っ！」

はあはあと荒く呼吸をしながら、俺は、奴らから逃れる為に細い横道に入った。が、それでも奴らを巻くことは出来ない。奴らは、バサバサと物凄い速さで俺の後ろを追いかけ、俺へと執拗に攻撃を仕掛けてくる。……たく、何てしつこさだ。

「なんでっ、俺がつ！ 何もっ、やってないっ、俺がつ、狙われるんだよっ！」

さっきから俺は、鞆で頭をガードしつつ走りながら、何か、奴らを怒らせることをしたかと必死に考えていた。だが、思い当たることなどちつともない。

光り物をちらつかせた覚えもないし、石すら投げた記憶もないわけだし……、一体、何が原因だというのだ。

「いて、いてっ！」

……しかし、知らなかった。

奴らが、こんなにも飛ぶのが速くて、何よりも、こんなにクチバシが痛いものだというのを。十六年生きてきて初めて、知った。

——意外と、強かったんだな。カラスって。

そんなことを頭の片隅で思いつつ、俺は、この状況を打開する方法を考えた。

だが、なぜ、襲われているのかすらもわからないのだ。そんな方法、わかるわけがない。

ということは、俺は、奴らが諦めるまで、体力が続く限り、走り

続けなければならないということになる。

——冗談キツイって……！

運動がそれほど得意じゃない俺にとって、このまま逃げ続けることは、不可能だろう。

このままいけば、まず、俺は地面に倒れ、そして、カラス共にそのクチバシで飽きるまでリンチに遭うであろう。

カラスにリンチに遭う日があるなんて……、思ってもみなかった。……そんなこんなで、近所の公園にたどり着いた時には、予想通り、俺の体力は、限界を超えていた。

足が棒の様に重く、荒い呼吸のせいで胸と喉が痛い。

「っ……！」

到頭、俺は力尽きて、バタリと前から地面に倒れてしまった。

そんな俺を、カラス共がゴミを漁るように突く。

だが、その頃には俺は、抵抗する気力も無く、ただただ、突かれて……、バサッ。

……その時だ。何やら、棒が何かを振った音がしたと思ったら、カアーツ、と一声。カラスの一匹がどこか悲鳴に近い声を上げた。

「？」

次の瞬間。その声を聞いた他のカラス達がザアツと俺から離れていく。

——何が……、起きたんだ……？

俺はジンジンと痛む身体を少し起こして、視界を上に向けた。と、そこには、宙に集まったカラス達を前にして一人。誰かがそこに、夕日色に染まった一本の棒を構えて、俺を庇う様に立っていた。

——女、の子……？

その子は、真っ黒のスーツに身を包んでいた。その横顔は、まるで透き通っているかの様に真っ白で、その短い髪の毛は白……というよりもキラキラしていて銀色に近い。

だが、明らかに日本人とは違う肌色、髪の色なのに、外国人には思えない。瞳の色が黒いからだろうか。

「あなたが……、柊、あき、ですか……？」

その姿に思わず見取れていると、突然、俺をじつと見つめて、そのどこか不思議な雰囲気の女の子は、そう疑問形で口にする。

——柊、あきだって？

俺は、聞き覚えがあるその名にピクッと眉毛を動かした。

そして、彼女を見上げる。

「お前、あき姉のこと、知ってんのか……？」

と、なるほど。そんな顔をして、彼女は、こちらにちらっと向けていた顔を前に戻した。

「そんなわけないですよ。だって、どう見ても、貴方は男ですから……ごめんなさい」

女の子は、なぜか俺に謝ると、ピツと手に持った棒をカラスの方に突き出す。

その瞬間、まさか、と俺の中で嫌な予感が過ぎる。

「おい、まさか、それでカラスをばこる気じゃ……」

「はい。だって、相手は“死魔人”ですから」

「“シマヒト”だって……？」

その単語に、俺はドキリと鼓動を鳴らした。

だって、それは、こんなところで聞くわけがない単語だから……

「ハアッ！」

そんな固まった俺を他所に、その単語を口にした女の子は、迷うことなくカラスに駆け寄り、そして、その棒を振り下ろした。途端にバサツとカラスは、散らばり、黒い羽根を辺りに撒き散らせる。女の子が振り下ろした棒は、まず一匹。見事カラスに当たった。途端に、シュンツとカラスの姿が煙りとなって消えてしまう。

……普通じゃ、ない。

俺がそう愕然としている内にも、ボンボン、ボンボン。カラス達は棒で叩かれ煙りになり消えてゆく。

そして女の子は、クルンと棒を手の平で回し、軽やかにステップをして、次々とカラス達を消していくと、あっという間にカラスは

残り一匹だけとなった。

「終わりですっ！」

クルンと棒を回転させながら女の子は、最後の二匹に棒をくるくると勢いよく向けてゆく。

だが、その時だった。

「えっ！」

突然、向こうから、一匹の黒猫が女の子へとシャーッと鳴いて、襲い掛かった。

そのせいでグラッ。女の子は、バランスを崩し、その勢いでカラッンと棒を落としてしまう。

「しまった……！」

途端に、チャンスとばかりにカラスがその鋭いクチバシを光らせる。

だが、そのクチバシはさつきとは異なり、どこか、異様な気を放っている様に思える。

「逃げろっ！」

その異様な気に、とつさに、俺はそう叫んでいた。

だが、女の子は、目を大きく見開いて、パチッ。目をギュッと閉じた。

……駄目だ。やられる……っ！

だけど、助けようにも俺はこの様。そこら辺にある石ころをかるうじて投げられるかどうかだ。だが、そんなことをすれば、当然、奴の攻撃は再び俺へと向くだろう。

——くそつたれ！！

「このっ……！」

短い葛藤の末、俺は、投げた。目の前にあった、その石ころを。途端に、カラスは怒りの声を上げ、グラッと標的を変えると、バサッとこちらに進路を変える。

——ああ、やっちゃった。

その瞬間、俺の中に物凄い後悔が溢れ出した。と、同時に、終わ

ったな、という諦めが湧く。

あれは、どうも普通のカラスではないようだし、俺もただじゃ済まないはずだ。

俺は目を閉じた。

「……やれやれ」

——だが、俺の予想は、大きく外れることになる。

まず、一つ。目を閉じた瞬間、暗闇に誰かの呆れたような声がした。次に、二つ。ブンツと何かを振った音と、カラスの長い鳴き声が辺りに響いた。

そこで、俺は、自分の身に何も起きていないことに気付き、ゆっくりと目を開けた。

そして、すぐに。黒いシャツを着た誰かの後ろ姿が俺の目に飛び込んできた。

それは、さっきの女の子……と似た、スーツ姿の男だった。

まず、その少し伸びた髪の色。それから、ジャケットはなかったが、その黒の格好。そして、雰囲気。どれも、あの女の子と同じだ。

違うといえば、その手に持った、長い槍。

男はそれをクルンと一回転させると、槍は、シュンツと姿を消した。

「……で？ こいつ、誰？」

そして、ポリポリと頭を掻いて、第一声。男は、ちらつとこちらを見ると、そう、ぺたんと地面に座り込んだ女の子に尋ねるのだった。

——ひどい目に遭った……

俺は、ボロボロの身体を引きずる様に何とか家までたどり着いた。と、部屋に入っただけなのに、ボタン。制服のジャケットを脱ぐと、ベツドの上に倒れ込んだ。

「……しかし、なぜ、彼が狙われたんでしょうかね？」

「加えていえば、なぜ、こいつは俺達の姿が見えているんだろうな？」

「……それは一番、俺が知りたいよ」

扉も開けずに、なぜか、俺よりも先に部屋に上がっていたそいつらに、俺はため息を溢す。

霊感などないはずなのに、それを今、見ているなんて……、悪夢に近い。

「ま、恐らく原因は、あき、だろう。お前、従弟なんだろう？」

「……まあね」

そう俺に尋ねたのは、さっきの黒スーツの男である。先ほどの自己紹介では、セトという名前だということと、ちなみに名前の由来が七月七日に死んだからという、どうでもいい説明まで受けている。「では、柊あきの近くにいた為に、霊感がついた、というわけですか……なるほど」

次にそう言ったのは、さっきの女の子……つばき、である。

——その後、この二人によって助けられた俺は、詳しい話をするために二人を家へ招いた。

なぜそんな必要があったのかと言うと、この二人が『普通』じゃないからだ。

では、一体こいつらは何者か。

……彼等は、いわゆるところの、幽霊ってやつだ。

んで、さっきの自己紹介によれば……職業は“シニカミ”とやらで、現世には仕事でやって来たらしい。

ちなみに、さっき俺を襲ったのが、死魔人（シマヒト）。悪霊や悪魔の類で、シニカミの敵に当たるそうだ。

——と、まあ、普通、そんな話をすぐ、信じる奴はいないだろう。嘘だと言って、笑い話にするだけだ。

だって、幽霊だぞ。幽霊。

それ自体が科学的に証明されていないオカルトだっていうのに、

幽霊達が戦争してるだって？ ふざけるな。てか、幽霊に職業なんてあるか！

……そう思うのが普通だ。

だが、少なくとも、この俺——春元夏人は、そうじゃない。いや、別に、頭は正常だし、気が狂ってるいるわけじゃない。

ただ……、前にも、同じような話を聞いたことがあるのだ。

シニカミと死魔人^{シマヒト}との戦争、“^{レイセン}靈戦”とやらの話を……

……ま。だからと言って、丸々信じるわけではないが。なんせ、聞いた情報元がいい加減だからな。真実、とは限らない。

「……ところで、あのカラス……何で俺を襲ったんだ？」

俺は、ベッドの上に座りなおすと、そう、二人に尋ねる。

それに対し、セトは考える素振りさえ見せずに、

「知らん」

そう、即行で答えた。……まあ、さつきから、二人でそのことについて考えていた様だし、当たり前前の返答と言っちゃ、当たり前だが……もう少し、考えてから答えてほしいものだ。

「でもなー。知らないからってお前を放置つつうのも、アレだしなあ。……仕方ない。一回、上に帰ってアマさんに聞か、うん」

「……セトさん。いくら長いからって短縮するのはよくないですよ。アマノジャクさんに怒られても知りませんから」

「いいんだよ。あの人が怒ったって俺の仕事が増えるだけだから」
そう言っつて、セトはニカツと笑みを見せる。そんなセトに対して、

「……ほんと、貴方つて変わり者ですよね」

つばきはそう言っつと、やれやれとため息を溢した。

「アマノジャクつて？」

「私たちの上司に当たる人です。本当はお名前がないんですが、それじゃ、ちよつと不便なので、シニカミの誰かがそう名前を付けたんですつて」

「へえ……」

「ま、最初の頃は、アマさんも嫌がつてたけどな」

確かに、『天邪鬼』なんて名前、誰だって嫌がるだろうな。もっと、いい名前を付けてあげればよかったのに……かわいいそうに。「……そういえば、お前らさ。あき姉に会いに来たんだけ？ 何のためかは知らんが」

そこで、ピクリ。

俺の何気ないその問いに、つばきの表情が一変した。

と、そんなつばきの表情に、机の上で足を組んでいたセトは、なぜか苦笑いを浮かべる。

「？」

——俺、なんか変なこと言ったか？

二人のその様子に俺は、首を小さく傾げた。

「あきさんは、死魔人^{シマイト}に命を狙われているんです」

と、しばらくして、つばきがそう、沈黙を破る。

「だから私は、彼女を守りにきた……ただの、シニカミとして」

「つばき……？」

どこか強い意志を秘めたような口調で、つばきは独り言のようにそうつばやいた。

と、すつと立ち上がって……そのまま、つばきはふつと姿を消してしまった。

それを見て、セトはやれやれとため息を溢した。

「私情は捨てろって言ったのによ……たく」

「……なあ」

「ん？」

「つばきって、あき姉と何かあったのか？」

「ちよつとな」

セトは、俺の問いにさらっとそう答えると、はあとまた、ため息を溢す。

「つばきがシニカミになったのは……まあ、あきのせいだからな……」

……

「えっ？」

そして、ボソツと、とんでもないことを呟いた。

——それは、つまり……あき姉がつばきを……？

その台詞に俺は、思わず目を見開く。

——まさか……

と、同時に、俺の脳裏の片隅で、『ある予感』が過ぎった。

「いつてきます」

かつたるい気分では、そう言っただけの戸を閉めた。

時刻は、朝の八時二十分。いつもよりも大分遅めに家を出た俺は、すぐ、黒スーツの人影を発見する。

それは、間違いなく、つばきだった。

つばきは、道路の脇で、俺の家の真向かいにある青い屋根の家を見上げて、まるで人形か何かの様に突っ立っている。一切、微動だにしない。

「おい」

その様子には俺は声をかけた。

と、チラリ。つばきはこちらに少し視線をやって、ずっと体の向きを俺の方へ変える。

「おはようございます」

そして、ペコツと頭を下げた。

「……何やってんだ？」

つばきが頭を上げて、俺は、そこに突っ立っている訳を尋ねる。

「いえ……あきさんを待っているのですが……」

と、俺の問いにそう答えたつばきは、また、青い屋根の家……あき姉の家を見上げた。

……どうやら、つばきは、ずっと、ここでこうして待っていた様だ。だが、いくら待っても、お目当ての本人は現れずじまい……、というわけか。

……まあ、あき姉は遅刻魔だからな。まだ、しばらく出て来ない

ことだろう。

「あき姉なら、しばらく出て来ないと思うぞ。そういう人だから」
俺がその旨を教えてやると、つばきは、何かを考える様に唇に右手を当てる。

「困りましたね……」

そして、小さくそう呟いた。

「何か、用事でもあんのか？」

その様子に、俺は、スクールバックを背負い直してそう尋ねる。

「いえ、用事というか……私は、貴方も守らなければなりませんから」

「セトは？」

「天界に戻りました。しばらくは戻ってこないかと」

「じゃあ、ここであき姉を待つか、今、俺と一緒に学校まで行つてまた引き返すか、どっちかな」

「はい。でも、後者の提案には一つだけ問題が」

「？ 問題って？」

「私はあきさんに会ったことはありませんが、あきさんの顔は知りません」

「は？」

つばきのその言葉に俺は、思わずそう声に出した。
会ったことがあるのに顔は見たことがないだと？
それは会ったことがあるとは言わないじゃ……

俺は、つばきの顔を見て、しばらく停止する。

「……何か、誤解をしている様ですね」

「誤解って？ どの辺が？」

と、つばきは、ふうと小さく息を溢す。

「……私は生前、目が見えなかったんです。だから、あきさんの顔や外見を知らないんです」

「……あ、そういうこと」

つばきの説明に俺は、“知らない”とはそういう意味だったのか、

と、改めて理解する。

「じゃあ、あき姉の家から離れるわけにはいかないよな……」

「はい。……ちなみに彼女はいつ出てくるでしょう？」

つばきの問いに俺は、いつもあき姉が来る時間帯を思い出す。

俺が窓からグラウンドを見ている限りでは、確か、一時間目の最中には一回も見かけたことがない。かと言って、二時間目の頭にある十分休みにも見かけた試しはない。

見かけるとしたら……そう。二時間目の中頃か、三時間目辺りか。

「ん。多分、あと、一時間くらいは軽く寝てるだろな」

「……困りましたね」

つばきは、更に困った様な顔付きで小さく唸った。

その様子は、まるで他人事とは思えない程の真剣さである。ましてや、自分がシニカミとなる原因を作った人の為とは、全く思えない。

「……夏人さん」

「ん？」

「夏人さんも一緒に待つってことは出来ないでしょうか？」

「……」

——それは、俺も一緒に遅刻しろということでしょうか？

控えめにそう聞いてきたつばきに、俺は固まった。

普通、遅刻したら、その訳を問いただされる。そして、その理由がくだらない場合や、特に無しといった場合、当然、先生に叱られる。

ちなみに、うちの担任はかなり厳しいと有名である。

この前なんて、寝坊でちょっと遅刻したという生徒に対し、朝のホームルームを返上して、長々と説教をした。挙げ句に、罰として職員用のトイレ掃除まで命じた始末である。

もちろん、俺は、トイレ掃除なんて御免だ。

……となれば答えは一つ。

「……じゃあ、俺、先に行くな」

「えっ？　ちょ、夏人さん！」

俺は、ひょいっと片手を上げると、つばきに背を向けた。
後ろからつばきの制止の声が飛ぶが、知ったことか。罰を受ける
とわかっていてわざと遅刻する奴なんか、あき姉くらいなものだ。
それに、いくら、昨日、死魔人^{シマイト}とやらに襲われたからと言って、
今日もまた、襲われるとは限らない。

しかも、まだ、早朝だ。幽霊っていうのは夜に現れると相場が決
まっているしな。

「……みーつけた！」

——え？

と、つばきでも俺でもない、突然登場した第三者のその可愛い声
に、十字路の真ん中に立った俺は、ふと、右を見る。

そこにいたのは、黒い、浴衣姿の少女だった。その小さな少女
は、俺と目が合うと、につこり、ユサツと横で結った髪の毛を揺ら
して笑うと、その何も履いていない足でびよこびよここちらに歩
み寄って来る。

「君、夏人君、だよな？」

「えっ？」

そして、そう言つて、ピタリ。俺の目の前で、タンツと止まると、
「早速だけど、死んでくれないかなあ？」

少女はそう物騒な言葉を口にして、どこからか現れた銀色の鎌を
手に、につこり微笑んだ。

それは、その小さな少女の背丈以上はある大きな物で……

「逃げてっ！　夏人さんっ！」

「っ！」

そこで俺は、今、目の前で昨日と同じく、有り得ないことが起き
ていることに気が付いた。

そして、自分の命が危ないことも。

「やあっ！ー！」

「っう！ー！」

ブンッ！

まず一振り目。目の前のその少女は、躊躇することなく、その度でかい鎌を俺に振り下ろす。

それを何とか避けて、俺は、再び目の前に鎌が振り下ろされたのを捉える。

——これは……間に合わない！

俺はギョツと目をつぶった。

と、カキーン。

そこで、俺の前に、黒い影が割り込んでくる。

「つばき！」

「はあっ！」

つばきは、銀の棒で鎌を止めると、それを弾き飛ばす。

少女は押し返されて、後ろへピョンッと、軽やかに下がった。

キャハハッと、笑い声が辺りに響く。

「久しぶりだねえ。つばきちゃん」

「朱音……っ！」

そう言った少女に、つばきはキッと睨みつけると、銀の棒をその少女に向けた。

と、それを見て、何が面白いのか、少女は声を上げて笑い出した。

「つばきちゃん。つばきちゃん。君じゃあ、朱音ちゃんには敵いませんよぉ〜？」

「っ……」

少女は、笑いながら、つばきを馬鹿にした様にそう言う。

それに対して、少女の言っていることは凶星なのか、つばきはキョツと唇を嚙んだ。

「そうだねえ？ セトちゃんとかならわかんないかなぁ〜？ でも、

つばきちゃんはムリ。あたしには勝てない」

「……だから？」

睨むつばきに少女は、また、笑みを浮かべる。

「だから、逃げた方がいいよ。あと、助けを呼ぶとかさ〜。つばき

ちゃんは、雑魚死魔人^{シマビト}の相手は出来るかもしれないけどさ、あたしは荷が重いつて。ね？」

「……それは無理な提案です。今、ここにいるのは私だけですから。逃げるわけにはいきません」

と、きよとん。少女は不思議そうな顔をする。

「あれ？ セトちゃんは？」

「今はいません」

「他のシニカミは？」

「この地域にはいません」

「ふーん」

それを聞いた少女は、何やら考え始めた。……と、ニヤリ。

何か悪いことでも思い付いたのか、少女の口元に悪い笑みが浮かぶ。

「でも、あきがいるじゃん」

「……あきさんはもう、シニカミじゃありません」

「そうだった？ でも、それじゃあ、あの時みたいにさあ、無様に助けてなんて言えないよね」

「っ！」

その瞬間、少女のその言葉につばきの表情がガラツと変わった。手は、プルプルと奮え、棒へとその振動がカタカタと伝わる。

「……つばき？」

俺はつばきの側で、そう小さく名前を呼んだ。だけど、つばきはそのまま、険しい様子……、そんな怖い顔付きのまま、震えている。

——これは……、怒り？

「っ……！」

そして、辺りに、ただならぬ空気が出始めたその時、つばきは、少女へ飛び出した。

それを少女は、面白い物を見ているかの様に笑みを浮かべて見る。

——駄目だ……！

誰だってわかる。

つばきは、完全にこいつの挑発に乗ってしまった。
そんなんじゃ、こいつには敵わない……！！

「つばき、駄目だ！！」

俺は、飛び込んで行ったつばきに向かってそう叫んだ。
だが、頭に血でも登っているのか、つばきは止まる気配は全くない。

「止まれ！ つばき！」

少女まであと数メートル。

止まらないつばきに再び、俺は声を上げるが、駄目だ。まるで、聞こえていない。

「つばきっ！」

つばきは、棒を振り上げた。

だが、その瞬間、少女の姿がシュンツと消える。

「っ！」

それに驚き、立ち止まるつばき。

棒を構え、辺りを探すが、少女の姿はどこにも見当たらない。

だが、つばきが視線を向こうにやった、その時だ。

黒い影が俺の前にぼやけて、少女が現れる。

そして、キラんと光るその鎌は、しっかりとつばきの背後に向けられていて……

「つばき！ 後ろっ！」

俺は叫んだ。

だけど、つばきがそれに気付いて振り返った時にはもう遅い。

「は……！」

その時には、すでに鎌は振り上げられた後で……

「だから言ったでしょ？ 君じゃあ、ムリだっ」

少女の台詞の後、ブンツと鎌が振り下ろされた。

——だが、すぐに、少女の表情が変わる。

「……ああ、もう。一体誰よ」

鎌の先に見えたのは、ブラウスと赤と緑のスカートの制服に身を

包んだ、分厚い長い髪の少女。手には、時代劇で目にするような赤い持ち手の、長い日本刀が鎌の刃と当たって、ガチガチと音が鳴っている。

そして、バサリ。風に乗ってこちらに飛んできたのは、まるで物干し竿でも入ってしまったいそうな、縦に長い赤の布製の袋。

——これは……、間違いなくそうだ。

鎌を止めたその人影はしばらくして、はあとため息を溢す。

「……私の睡眠の妨げをした奴は」

そして、あき姉は、さっき言った言葉の続きを不機嫌な声でそう言った。

第二話 死魔人

『上では、シニカミっていう霊と死魔人（シマヒト）っていう悪霊が戦争してるの』

……そんなこと言われて、『ふーん、そうなんだ』って納得する奴なんかいないだろう。

俺だってそうだった。

突然カラスに襲われて、それを不思議な少女に助けられて、今度は小さな女の子に殺されそうになって……

そんなことが次々と起こらなかったら、そんなこと、信じなかった。

こんな光景を目の当たりにでもしなかったら、そんなふざけた話、真に受けるわけがない。

……そんなオカルトファンタジーの世界へと、突然、飛び込んできた俺の幼なじみでもある柊あきは、不機嫌そうな表情で目の前のちっこい浴衣姿の少女と対峙する。

手には日本刀を持ち、振り下ろされた少女の度でかい鎌をがっちりと防いでいる。

辺りに、ガチガチと刃と刃がぶつかる音が鳴った。

「……貴女が、柊あき……」

その様子を、あき姉の背後でただ呆然と見上げていたシニカミの少女、つばきは驚いたように、そう言葉を発した。……それもそうだ。まさか、こんな形であき姉と会うとは思っていなかっただろうからな。

しかし、疑問なのは、どうしてあき姉がこのタイミングで登場したのか、ということだ。

あと、なぜか不機嫌だし、『睡眠を妨害した』とかいう台詞も気になる。

それと、その日本刀……

警察にでも見つかったら、銃刀法違反で確実に捕まるだろ。

横に細くて縦長の、妙な袋を毎日持ち歩いていたら疑問には思っていたが、まさか、その中身が日本刀だったとは…

…一体、どこで手に入れたんだか。

「あれれ〜？ どうして、もうシニカミじゃないあきにあたしのこ
とが見えるわけ〜？」

と、あき姉と対峙したその黒い浴衣の少女はそう言って、首を傾
げた。

「あと、死魔人^{シマイト}の鎌を受け止めるなんて、死魔人^{シマイト}かシニカミの武器
じゃなきゃ出来ないのになあ……」

—— やっぱり、こいつ……死魔人^{シマイト}だったのか……

大方そうだろうとは思っていたのだが、俺は今のその言葉でそう
確信する。

しかし、なんでこいつは俺を殺そうとしたんだ？

最初、こいつは俺に向かってその鎌を振り下ろしてきた。つばき
がいなければ、確実に死んでいただろう。

だが、俺はあいつらに命を狙われる筋合いはない。……あき姉な
らば、話は全く違うだろうが。

「そんなの私を知るか」

そんなトラブルメーカーの超問題児。俺の一つ年上である柊あき
さんは、死魔人^{シマイト}の少女のその質問にさりとそう答える。と、カキ
ン。

あき姉は、グイツと刀に力をいれると巨大な鎌を上弾き返した。

「よつと」

鎌を弾かれた死魔人^{シマイト}の少女は、ぴょんと、後ろへ少し下がる。
「いきなり危ないな〜。弾くなら弾くって言ってよあ」

そして、そう言ってぶくつと頬を膨らませた。

と、あき姉が持つ日本刀に鎌の刃先を向けて、

「だってそれ。『払いの剣』でしょ〜？」

そう言葉を続ける。

「あきだけでも危険なのに、あきがそんなの持ったらダメっしょ？ もう。前よりも増して危険になっちゃって…」

「危険？ それ、朝っぱらから鎌、振り回してる奴が言える台詞？」

「大丈夫。幽霊って大半の人には見えてないから」

「なるほど」

「……いやいや。そこは納得するところじゃないだろ。」

確かに見えない人は問題ないだろうが、見えてる人にとっては大問題だろう？

「……俺も昔は前者の方だったのに……なんでこうなったんだが……」

「……でもま、ファーストコンタクトもいい感じで取れたし、今回は見逃してあげるね。あき。それから……つばきちゃんも」

「ファーストコンタクト……？ それは一体、どういうことです！」

「ふふふ。それは秘密」

クルリ。つばきの質問にそう答えた死魔人の少女は、ニコツと笑ってあき姉達に背を向けた。頭の横に一つに束ねられた髪がゆさつと風に揺れる。と、彼女の周りがさつき鎌を出した時と同様にぐにやつと歪んでゆく。

「待ちなさい！ 朱音！」

その光景に慌てた様につばきは手を伸ばす。が、つばきが朱音と呼んだその少女は、こちらにバイバイと手を振ると、次の瞬間。まるで、最初からそこにいなかったかの様に、スーッと姿を消した。

「っ……！」

それを見届けて、つばきはギュツと伸ばしたその右手を握りしめた。

「……ふあゝあ」

と、そんなつばきのすぐ側で、さつきとは表情が一変したあき姉は、おっきな欠伸をする。

「さて、と。眠いし、学校に寝に行きますか」

そして、そう言つと、俺の方へとテトテ。そこにあった鞆を拾つて中へ日本刀をしまい始めた。

——てか、学校に寝に行きますか……って。

よいしょと日本刀の袋を肩にかけたあき姉に、俺はハアとため息を溢す。

この人は一体、学校を何だと思っているのやら。そんなことをやってるから、赤点を採るんだ。

「……ところであき姉。睡眠を妨害されたと言ってたけど、もういいのか？」

「だって、消えちゃったし。眠いし、めんどくさいからもういい」

「ずいぶんと投げやりだな……」

そうして、呆れる俺を余所に、もう一度欠伸をしたあき姉は、至極眠そうな顔で登校するのだった。

……柊あき。彼女は、俺の幼馴染である。

歳は、俺があき姉と呼んでいることからわかるように、俺よりも一つ、年上だ。

だが、あき姉は現在、俺と同じ、一年生をやっている。……というのも、あき姉は昔、事故に遭ったせいで一年間、意識不明状態だった。その為、一年間のタイムラグがあるのだ。

ちなみに、成績は常に下の下。……これはタイムラグとかそういうのは関係なく……昔からである。

一方、運動神経だけはずば抜けているが、面倒なことを嫌い授業をよくサボる為、体育の成績も悪い。

加えて、いつも一時間目から学校に来た試しがなく、学校に来たとしても、大半を寝て過ごしている。

……間違いなく、うちの高校で一番の問題児である。

そして……元、シニカミだ。

「……で？ なに、あんた。狙われてんの？ 悪霊さん方に」

弁当を食べながらあき姉は緊張感なくそう言っ、箸を俺に向けた。

「そんでその理由が私のせいと……。って、なんで私のせいになるわけよ。意味わかんない」

「意味わかんないって、俺の方が意味わかんねえよ」

むっと口を尖らせてあき姉は口の中に海苔弁をかきこむ。

その向かいで唐揚げに箸を突き刺した俺は、はあとため息を溢した。

あき姉にも俺があいつらに命を狙われている理由がわからないなんて……。最悪だ。

「でもあいつらは、自分の仲間になりそうな魂の持ち主を殺して仲間にするから、多分、夏が狙われたのもそっちの線じゃないの？」

「死魔人^{シマイト}になりそうな魂って、どんな魂だよ……」

「後ろ向きで弱虫でミジンコな魂」

「なんだそりゃ」

後ろ向きで弱虫でミジンコって……

俺の魂はミジンコだって言いたいのか？

しかも、悪霊になりそうな魂って……。意味がわからない。第一、そんなもの、前もってわかるか。普通。

「ま、なんにせよ、守ってもらえるんでしょ。シニカミに」

そう言って、ピツとあき姉は横で突っ立っていたつばきの方に箸を向ける。

その瞬間、つばきの表情がピクリと動いた。

途端に少しだけ、空気が凍りつく。

——やっぱり、なんかあき姉相手だと、つばきは警戒するみたいだな。

俺は、この嫌な空気にまた、ため息を溢す。

だが、当の本人は気にすることなく最後の卵焼きをパクリと食べた。

そして、小さく手を合わせると見る見るうちに弁当箱を片付けてゆく。

「ま、私も昔のことはあんまり、覚えてないからさ。もしかしたら、

あんたがあいつらに狙われるようなこと、したかもしれない」

「じゃあ、とつと思いついて出してくれ」

「うーん。努力してみるわ」

そう言つて、あき姉はそそくさと机を元に戻して、教室を出て行く。……大方、保健室のベッドで仮眠でもとるつもりなのだろう。いつものことだ。

「……彼女は、昔の記憶がないのですか？」

と、弁当箱を片付けていると、突然、今まで黙っていたつばきが、俺にそう尋ねてくる。

俺は、周りに人がいるのであえて声には出さずにコクリと軽く頷いて、

「少しな」

そう小さく付け足した。

「そう、ですか……」

「……？」

俺の返答につばきは、また黙りこむ。

そして、少し真剣な顔つきのまましばらくそうしていたと思った
ら、ボソリ。

「覚えていないのですね……」

「つばき……？」

つばきは、とても悲しげな顔でそう呟くと、ふわっと姿が見えなくなつた。

人通りが少ない住宅街。

部活に入っていない俺は、いつも三時過ぎの今頃に下校する。

友達のほとんどは部活に入っているから、帰りはいつも一人である。

……というか、うちの高校は部活動が活発で、部員集めも積極的に行っているから、帰宅部は一学年でも数人しかいない。

ちなみに、うちのクラスで帰宅部なのは俺とあき姉だけだ。

……そのもう一人の帰宅組、あき姉といえば、昼休みに見てからそれから一度も姿を見ていない。……どうせ、保健室で夢の中にいらつしやることだろうが。

あと、つばきの奴もあれから姿を見ていない。俺とあき姉を死魔^{シマ}人から守るとか言ってたくせに……どこでサボっているのやら。

もしかしたら、屋根の上とか、ここから目が届かない所で見張つてるとか、あるいは、姿を消して案外近くから見張っているのかもしれない。何たって、相手は幽霊だし、どっちもありえない話ではない。

「……つばき？」

そう思った俺は試しに、小さくつばきの名前を呼んでみる。

だが、返事はないし、辺りは異常なほど静かで、何かがいる気配は全くない。

「たく。どこに消えたんだ？」

別に、いなくなったらいなくなったで一向に俺は構わない。幽霊に見張られているだなんて、そりゃあいい気分ではないし。……まあ、守ってもらって言えた台詞じゃないけど。

でも……。つばきとあき姉の関係はちよつと気になる。あき姉はつばきに普通に接しているし……それも、まるで知らない人って感じで。

確かに、あき姉はシニカミだった頃の記憶は曖昧だと言っていた。だけど、つばきのことは、覚えているはずなのだ。だって、あき姉はあの時……

——と、その時だ。

「？」

……おかしい。何かが、おかしい。

俺は、さつきから妙に静かな辺りに、ふと、足を止めた。

辺りを見れば、そこはいつもと変わらない、いつもの住宅街だ。だけど、明らかにおかしい。……音が、まるでない。

ここは外だ。いくら人通りが全くないからといっても、普通、鳥の声ぐらいいしてもいいはずだ。なのに、さっきから、それさえ聞かない。

なんだ？ 何が起きている？

「？」

と、俺がこの小さな異常に眉間にしわを寄せていると、前からカコン、カコン、と何か金属を引きずったような、そんな音が聞こえてくる。

その音に、俺は一瞬ほっとした。……どうやら今朝、ありえないことを目の当たりにしたせいで、少し神経質になっているようだ。

……だが、すぐにまた、俺はおかしいことに気付く。

確かに、音はする。それも向こうから近付いてきているようで、音がだんだん大きくなっていつている。

しかし、それだけだ。金属を引きずっている音がするのに、足音が全く聞こえない。

しかも、俺の前方は直線道路。近くに曲がり道や交差点はない。だが、そこに人影はない。

……ということは、だ。

——この音はどこから聞こえている？

「っ！」

俺は慌てて、後ろを振り返った。だが、やはり人はいない。

もう一度、音のする方向を探ってもみるが、やっぱり前から音が聞こえる。それも、間違いない。

「まさか……」

脳裏に嫌な予感が過ぎった。

その予感が当たっているならば、次に起きる異変はこうだろう。目の前の景色がぐんにやりと歪み、そこから黒い人影が現れる。今朝、目の当たりにした、あの銀の鎌がカツツンと道路に落ちて……、うつすらと、黒の浴衣の上に羽織りを羽織ったその男は笑みをみせる。

「死魔人……っ！」

俺は、ズリツと後退りをした。

何だ、こいつは……。今朝のあの少女とは比べようがない、この、言いようがない感覚。……圧迫感、とでも言えばいいのだろうか。まるで、押し潰されそうな……。呼吸さえも苦しく、息が出来なくなるような……。重たい感じ。

……間違いない。

——この男はヤバイ……。！

本능がすぐにそのことを察知した。

だが、その途端、身体が突然動かなくなる。

——金縛り……。っ？

おいおい。マジかよ……

オカルトの大定番。こういう感じのには大抵付き物だが、だからって、こんな、まだ日の高いうちに、しかも住宅街のど真ん中で普通、金縛りになんて遭うものなのか？

普通、そうゆうのは布団の上で、とか、真夜になる、とか、そう相場が決まっているんじゃないのか？

「久しぶりだな……。夏人」

「っ？」

そう、半分、パニックになりながら思っていると、突然、その男がそう話しかけてくる。

……久しぶり？ ……何のことだ？

そんなこと言われても全く覚えがない。大体、俺に靈感があると発覚したのは昨日の夕方のことだぞ？

というか、なぜ、こいつは俺の名前を、しかも、妙に馴れ馴れしく口にかけている？

「大丈夫だ。身体は封じたが口は封じていない。……話しは出来る」と、そんな何も喋らずに固まる俺の様子を見てか、男はそう促した。

さあと言わんばかりに手を表に返してこちらに差し出し、細いそ

の目を更に細くする。

「……誰だ、お前」

薄ら笑みを浮かべ、こちらに手を差し出した男は、俺の問いにふつと笑みを溢す。

「俺の名は黒魔^{くろま}だ」

そして、黒魔は素直にそう答えると、一步。足音も起てずにこちらへ歩み寄った。

「お前を迎えに来た」

「え……？」

突然のその申し出に、俺は思わず目を見開いた。

——何だ。こいつは何を言っている？

……そう思ったのがいけなかった。

「っ！」

バチッ！

俺が動揺したその隙を突かれた。

黒魔はその僅かな隙を突いて、その差し出していた手で俺の右手を掴んだ。

その途端に、右手に電気か何かが流れたみたいにビリビリッと痺れが走る。続いて、頭の中に何かのイメージが流れてきて……

——これは……

走馬灯のように、何かが頭の中に流れた。

音、映像、知識……

それらが理解できないくらい早く、俺の脳裏を駆け巡ってゆく。

だが、それは意味不明で、早すぎて理解できないはずなのに、なぜか、そう。何だか、懐かしくて……。何かが、何か……忘れていた何かがあともう少しで思い出せるような……そんな感覚に陥る。

……そんなものなどあるわけがないのに。

「っ？」

と、その時だ。

何かが、頭に浮かびかけたその瞬間、ブツリと脳裏に流れてこん

でいた何かのイメージが途切れる。

俺はその場に崩れ落ちた。

「ハアハアハア……っ」

——……一体何なんだ？

全身に、尋常じゃないくらい汗が溢れ出している。

息がなぜか荒いし、一体、何が起こっているんだ？

と、俺はふと、目を上に向けた。

そこに見えたのは、同じ黒でもこちらは浴衣姿ではなく、スーツ

姿。黒魔とは正反対の白い、ちょっと伸びた短髪が見える。

「セ、ト……？」

道路に両手を付いた俺は、その目の前の人物の名を呼んだ。

つばきとペアを組んでいて、つばきの大先輩に当たるシニカミ……

確か、アマノジャク、とかいう人の元に、俺のことで戻っていたはずだが……

「大丈夫か、夏人」

と、セトはこちらをちらりとも見ずに、黒魔を睨んだままそう聞いてくる。

「あ、ああ……」

その問いに、俺は少し呆然としながらそう返事を返した。

——この感じ……

何か、皮膚がピリピリとしてきた。

セトの口調も、昨日よりかなり真剣なものだったし、緊張感がピシバシとこちらに伝わってくる。

「……黒魔、てめえ」

そして、セトはしばらく黒魔を見つめると、そう切り出した。

「あきをどこにやった」

「え……？」

その言葉に俺は一瞬、思考が止まったような気がした。

……どこにやった、ということは、つまり、あき姉がいなくなっ
た、そういうことだ。

そしてきつと、セトは、いなくなつたあき姉を探していたのだらう。多分、つばきも一緒に。

だが、いくら探してもあき姉は一向に見つからない……。と、そんな時、俺が黒魔に金縛りにあつてゐる所を見つけた。

……となれば、だ。誰だつて同じことを考えるはずだ。

——あき姉が、死魔人^{シマヒト}にやられた……。っ？

俺はぱつと、セトの背中に視点を戻した。

黒魔はセトの問いに何も答えない。それは、言つつもりがないということなのか、それとも、何も知らない……。そういうことなのか、もしない。

「あきはまだ死んでいない。魂の消滅は確認されていないからな」

「……………」

「さあ、答えろ！ あきをどこへやつた！」

黙る黒魔に、セトはもう一度そう叫んだ。

と、ずつと沈黙を続けていた黒魔がピクリと動いた。引きずつていた大きな鎌がカランッと鳴る。

「……邪魔だ」

そして、低く、冷たい声で一言、そうセトに言い放つた。その瞬間、辺りの空気がまた、ガラリと変わる。

強いプレッシャー。それと強い恐怖。その二つが体に乗つかつて、身体はもちろん、声までもが自由に操ることが出来ない。

明らかに、さっきの金縛りとは、比べものにならないほど……。凄まじい。

「セト……。お前は優秀なシニカミだ。他のシニカミとは違って転生の道を選ぶことなく、本能のままに長年、シニカミをやってきた。……ならばわかるだらう？ お前と俺の実力の差を」

「っ！！」

「そして、俺がどういう男かを」

——一瞬の出来事だった。

「セトっ！！」

「つつ……っ！」

グラッとセトの体がこちらへ倒れる。身体から黒い、血が吹き出して……、腹を、切り裂かれている。

「……興が冷めた。夏人、お前のことは今度、迎えにくることにしよう。先にあきを探して……殺す」

「っ！」

黒魔の辺り一帯がぐにゃっと歪み出す。……朱音という死魔人が逃げた時と同じだ。

だが……。今は、そっちにかまっている暇はない。

「しつかりしろ！ セト！」

俺は倒れたセトの元へ急いで駆け寄った。

黒のスーツはすっかり裂け、そこからぱっかりと腹部が痛々しく覗く。

何が起こったが全く見えなかったが、これは間違いなく、あの鎌によつて斬られたものだ。あの大きさの鎌をどうやって一瞬で振り下ろしたのかは疑問だが……今はそんなことを考えている場合じゃない。

「くろ、まは……？」

「……消えた。あき姉を殺しに行くつて……」

「くつ……」

俺のその言葉にセトは痛みでか、それとも悔しさからか、表情を歪める。

「夏人……」

「なんだ？」

「つばきに、このことを伝えてくれないか……？俺も、この傷をどうにかしたら、あきを探しに行く」

「えっ？ つばきに伝えにいくのはいいけど……セト。お前、その傷じゃ……」

そこまで言つて、俺はセトが手で抑えた傷口をチラッと見た。

そこからは、まだ血が流れ出していた。こういうことはあまりわ

からないが、普通、そこまで深く斬られたらやばいんじゃないだろうか？

あき姉を探しに行くだなんて……無理に決まっている。

と、俺の考えていることを察したのか、セトは苦しそうにしていたその顔ににやりと笑みを浮かべる。

「大丈夫だ……。攻撃を受ける瞬間、辛うじて急所はかわした。やられたのは……器だけだ。魂はダメージを受けていない」

「もし……魂にダメージを受けてたら？」

「それでも……俺の場合、一回くらいは、大丈夫だ。だから安心しろ」

「……わかった」

セトの言葉に俺は少し考えて、そう答えを出す。

そして立ち上がると、負傷したセトを残して走り出した。

——セトが一瞬でやられた。

あの男が相手ならば、つばきも、あき姉もセトの二の舞に為りかねない。

それに……。つばきはあき姉を守ると言っていたが、何か、嫌な予感がしてならない。

あき姉に対する、つばきのあの表情……。そして、昔聞いた、あき姉のあの話……

——『私は、彼女を必ず救ってみせる』

住宅街の細道を走る俺の頭に、ふと、あき姉の声が聞こえてくる。その声が尚更、俺の中の嫌な予感をより一層、掻き立てた。

「くそ……！」

もし……。もしも、俺の予感が当たっているならば、あき姉とつばきを黒魔と遭遇させるわけにはいかない。

もし、あき姉がつばきと一緒に黒魔と出会ってしまったら……

「あきさん……！」

「っ？」

と、その時、つばきによく似た声が辺りに響いた。

声が聞こえたのは、右の方……。そこは、桜公園と呼ばれている、春になると辺りにある何十本ものの桜が満開に花開く、少し広めの公園だ。

俺は荒くなった息を整えながら、ゆっくりと公園に足を踏み入れる。

そして、今は、桜も散ってしまったその公園の、ある一本の桜の近く……

——手遅れだったか……。っ！

俺は、そこに倒れた人影を見て、唇を噛んだ。

「あき姉！」

その木に寄り掛かって倒れていたのは、見慣れた制服を着た長い髪の女性……

それは間違いなく……。柊あき、その人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4112ba/>

四二紙 —シニカミ—

2012年1月10日22時49分発行